

## イヌ肥満細胞腫の最新の論文紹介

訳：鳥取大学農学部共同獣医学科獣医外科学教室 准教授 大崎智弘

海外の論文にはなりますが、昨年報告のあった最新の下記のイヌの肥満細胞腫の論文を紹介させていただきます。イタリアの論文でありますので、日本国内で飼育されている犬種とは相違があるかと思いますが、参考になればと思います。

Epidemiology of Breed-Related Mast Cell Tumour Occurrence and Prognostic Significance of Clinical Features in a Defined Population of Dogs in West-Central Italy.

Vet Sci. 2019 Jun 6;6(2). pii: E53. doi: 10.3390/vetsci6020053.

本研究は、1つの獣医教育病院（VTH）に受診したイヌの肥満細胞腫の頻度、リスクおよび予後因子に関して調査がなされた。2010年1月から2016年1月までのVTHの臨床データから得られた98頭の肥満細胞腫のイヌ（MCT群）と対照群としての13,077頭のイヌ（VTH群）との間で、犬種、年齢、性別および不妊手術の有無に関して比較がなされた。MCT群において、シグナルメント、部位、大きさ、腫瘍の数、潰瘍、組織学的グレード、リンパ節あるいは遠隔転移の有無に関して比較がなされた。ボクサー（オッズ比\*：7.2）、アメリカンピットブル（オッズ比：5.4）、フレンチブルドッグ（オッズ比：4.4）およびラブラドルレトリバー（オッズ比：2.6）が好発犬種であった。MCT群はVTH群と比較して有意に高齢であった（ $p < 0.0001$ ）。VTH群と比較して、MCT群では不妊手術したイヌ（オッズ比：2.1）および避妊メス（オッズ比：2.3）は、不妊手術していないイヌおよび不妊手術していないメスイヌそれぞれと比較して有意に罹患率が高かった。潰瘍（オッズ比：5.2）およびリンパ節転移（オッズ比：7.1）は、より大きな腫瘍においてより頻繁に認められた。潰瘍および3 cm以上の肥満細胞腫は、リンパ節転移と大いに関連していた（オッズ比：24.8）。再発は、肥満細胞腫に起因する死亡に関連（オッズ比：10.50、 $p = 0.0040$ ）し、末期の肥満細胞腫はより短い生存期間と関連（ $p = 0.0115$ ）していた。3 cm以上の肥満細胞腫（ $p = 0.0040$ ）、リンパ節転移（ $p = 0.0040$ ）あるいはより高いWHOステージ（ $p = 0.0234$ ）のイヌは、生存期間が短かった（図1）。

以上のことから、特定の犬種およびより高齢で不妊手術したイヌにおいて、肥満細胞腫が高頻度に認められた。3 cm以上の肥満細胞腫およびリンパ節あるいは遠隔転移は、より短い生存期間と関連していた。

(オッズ比\*：ある疾患への罹患しやすさを、2群間で比較する統計学的な尺度のことをいう。オッズ比が1.0とはある疾患への罹患しやすさが2群間で同じということであり、オッズ比が $>1.0$ では疾患への罹患しやすさが、ある群でより高いことを意味する。)

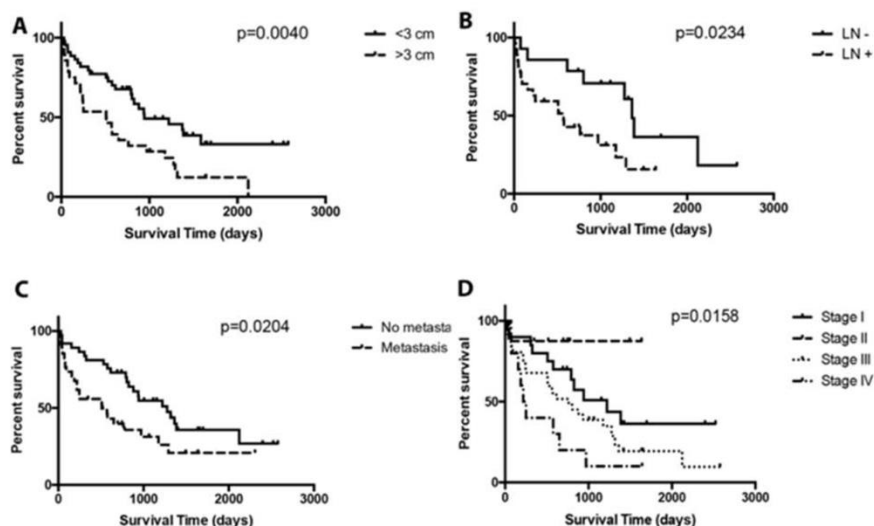


図1 肥満細胞腫に罹患したイヌのカプラン・マイヤー生存曲線

(A)： $>3$ cmの肥満細胞腫のイヌの生存期間の中央値は510日で、 $<3$ cmの肥満細胞腫のイヌの生存期間の中央値は943日であった ( $p = 0.0040$ )。

(B)：リンパ節転移が認められた肥満細胞腫のイヌの生存期間の中央値は570日で、リンパ節転移が認められなかった肥満細胞腫のイヌの生存期間の中央値は1,362日であった ( $p = 0.0234$ )。

(C)：遠隔転移が認められた肥満細胞腫のイヌの生存期間の中央値は511日で、遠隔転移が認められなかった肥満細胞腫のイヌの生存期間の中央値は1,276日であった ( $p = 0.0204$ )。

(D)：WHO ステージング1、2、3および4のイヌの生存期間の中央値は、それぞれ1,221日、到達せず、763日および234日であった ( $p = 0.0158$ )。